校長室だより～燦燦～ №８６２

Ｋシステム

2023.10.3

野田中学校に数学科のＫ先生がいる。昨年度は研修主任、今年度は進路指導主事を務めている。特に、今年度は外部からの業務が複数舞い込んできた。「頼まれごとは試されごと」などといっている私も、さすがに多いなと考えた。本人と協議し、やむなく一つは断った。私にしては珍しいことである。Ｋ先生には、「教員人生のピークが来たと思ってやるしかないな」と話した。そして、「後になってわかることだけれども、あの１年が大きかったなあとなると思うよ」と伝えた。

Ｋ先生が、７月に研究授業を行った。授業を参観しながら、思わず「ん～」とうなってしまった場面があった。授業を見てうなったのは初めてのような気がする。そのくらい、先生の働きかけが見事だった。こちらの想定を超えていた。この授業では、多くの方が参観していた。きっと得るものが多かったのではなかろうか。

Ｋ先生は、９月にも研究授業を行った。Ｋ先生の授業を見るようになって３年目になる。見るたびに少しずつ授業が変わってきている。それは、本校の研究内容ともリンクしている。本校の研究主題は「一人も取り残さない『わかる』授業システムの構築」である。こういう授業をすれば、誰一人取り残すことなく、「わかる」授業になるのではないでしょうかという提案をしたいのである。Ｋ先生の授業は、本校の研究内容を地で行くものである。

９月の授業を見て思ったことがある。７月と９月の授業を比較すると、今までよりも変化は少ない。いよいよ数学科の授業システムができてきたのではなかろうか。Ｋ先生の授業の特徴を挙げてみる。明るい。笑顔である。５０分間ずっと笑顔である。安心感がある。導入から学習課題にスムーズにいく。学習課題の聴写と共書きを毎時間やっている。生徒にとって親密度の低い言葉も確認している。導入が実にコンパクトである。丁寧すぎない。同じことを繰り返して言わない。無駄なことを言わない。ここまでの導入の１０分間で、その後の授業の方向性は決まっている。

課題解決の段階になると、「なぜそうなるのか」を考えさせる。ペアで話し合わせる。指名した生徒に説明をさせる。次がポイントである。Ｋ先生は「どう、納得？」とよく言っている。「わかった？」ではない。「納得」というところが重要である。その後は、「では、隣の人に話してみて」となる。友達の発表を再生させるのである。「できた人？」と確認する。ここで、わかったつもりが、うまく伝えられないということが起こる。すると、また別の生徒を指名して説明させる。また、隣の人に説明させる。また「できた人？」となる。このように、繰り返し再生させる。すると、徐々に理解していき、発表力もついていく。

その後の適用問題に取り組む場面では、一人一人の状況を見て歩き、赤ペンで丸をつけたりしていた。それがすばやい。いつもやっていないと、こうはならない。生徒にとって、先生の赤ペンは絶対である。数学専用の座席にすることもある。グループの中のできる生徒が、他の生徒に教えるのである。こうすることで、できる生徒も、できないでいる生徒も、共に伸ばそうとしている。

９月の授業では、おもしろいことがあった。授業の様子を写真に収めていた教頭先生が、ペンを落としてしまった。こういった場合、何人かの生徒は、そちらを向いてしまうものである。ところが、誰も向かない。気にもしていない。なぜか。全員が黒板の方に集中しているのである。これが、授業の最初からずっとなのである。先生の説明や友達の説明を食い入るように聞いている。全員が数学のことを考えている。

Ｋ先生に伝えた。「先生の授業に名前をつけます。Ｋシステムです」Ｋシステムの数あるキーワードの中からいくつか選ぶとすると、「納得」「再生」「赤ペン」そして「笑顔」だろうか。生徒の数学の学力を上げようと、日々努力を重ね、授業を改善してきたＫ先生には頭が下がる。常に謙虚である。「Ｋシステム」それは、私からＫ先生への最大の賛辞である。